



Title	谷崎潤一郎『不幸な母の話』論：「私」が捉える母子の関係
Author(s)	張, 麗静
Citation	阪大近代文学研究. 2009, 7, p. 27-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92659
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

谷崎潤一郎『不幸な母の話』論

「私」が捉える母子の関係――

張 麗静

はじめに

『不幸な母の話』（『中央公論』大正十年三月）は「私」の語りと兄の遺書から構成されている小説である。

まず、梗概を確認しておこう。夫に先立たれながらも「賑やかな陽気」な母は、子供たちの愛情に包まれて「幸福」な生活を送っていたが、「兄の結婚を一転機として」その性格を一変させる。母の性格が一変した原因は後に自殺した兄の遺書によって明らかにされる。遺書によれば、新婚旅行中の兄夫婦を訪ねて一緒に舟に乗った母は、船の転覆で海に落ちてしまう。兄は船が転覆した際、「偶然」に妻を先に助けたため母を見分けられず、彼に縋る手を振り切った。母は、自分に「従順」で「優しい」と信じて疑わない兄が自分より妻を優先して助けたことにショックを受け、陰鬱な性格となる。その後、母は兄をはじめとする子供たちに積極的に打ち解けようとせず、やがて死に至る。兄は妻を愛するため「ほんた

うに死にたくない」と披瀝する一方で、「親殺し」、「恋人の爲めには親を裏切る不孝者」という良心の呵責に耐えきれず自殺しなければならぬという。

本作に関する作品評¹⁾は高い評価と低い評価に別れているが、管見の限り、本作に関する詳細な先行研究は殆ど見当たらず、これまでの谷崎の研究史において本作は必ずしも重視されてきた作品とは言えない。野口武彦氏は兄イコール作者・谷崎といった捉え方を前提に、谷崎の現実の母（関）に対する心理的な葛藤と兄の心理を重ねる。また、「兄は無意識の法則にみちびかれて「永遠に若くて美しい女」としての母を妻の中に再発見していた」²⁾とも述べる。しかし、本作の僅かしき紙幅を占めていない兄の陳述に着目して分析することは、本作の語り手「私」の存在をあまりに軽視することになるのではないか。

大正六年五月十四日に、実母・関がなくなつた後、谷崎は、『ハツサン・カンの妖術』（『中央公論』大正六年十一月）を

はじめとして、『母を恋ふる記』（『東京毎日新聞』大正八年一月十八日、同年二月十九日）、『吉野葛』（『中央公論』昭和六年一月、同年二月）、『幼少時代』（『文芸春秋』昭和三十年四月、昭和三十一年三月）など、亡母に思慕の念を寄せる、いわゆる（母性思慕）の要素を含む作品を立て続けに発表する。従来、これらの作品には男主人公（Ⅱ子）の美化された実母に対する思慕の念が通底していることが指摘されてきた。先に挙げた作品群と同様に、本作は子としての語り手「私」が亡母に思慕の念を寄せながら、兄と母の関係を中心に語っている。本作を谷崎作品の中でどのように位置付けるべきだろうか。そのことを明らかにするためには、本作における「私」の語りの内容を明らかにすることからはじめる必要があるだろう。

一 兄と母の関係を話題とする「私」

本作は「不幸な母の話——或は「不幸な姑の話」と云つても差支へはない」と、母を「不幸」であると位置付けながら語り始められる。ところが、語り手「私」は「不幸な母」の姿を語り続けていくのではなく、世間の姑と嫁の問題に触れた後、兄と母の關係へと話題を移していく。「私」は兄が結婚した後、母の「性質」が変わった原因が兄ではなく、「彼女も所謂「姑根性」があったことは争はれない」と、母自身

にもあることを指摘する。さらに「私」は、「此の二つの死には、今から思ふと恐るべき因縁の糸が繋がつて居たので、ある意味では母を殺した者は兄であり、兄を殺した者は母だとも云へる、殊に、兄の死に方は尋常の死に方ではなかつたのであるから」と、兄と母との特記すべき関わりを読み手と想定される「読者諸君」に明示する。こうして「私」が読み手としての「読者諸君」に兄と母の關係のミステリアスな印象を与えながら、兄と母への思いを言い表している様子を「私」の語りの中に一貫して見ることが出来る。例えば、

斯う書いて来ると、わたしの母は鬼のやうな姑で、わたしの兄は又彼女を虐待し抜いた不孝者のやうに聞えるであらう、が、読者諸君ようかわたしの母の爲めに、また兄の爲めに、決してさう思つては下さるな、たとひ一分間でも諸君にさう思はせることは、死んだ二人に対していよく／＼氣の毒な訳があるのだ。私の母は鬼のやうな人ではなかつた、夫に対しては貞淑な妻であり、子に対しては慈愛深き親であつた。私の兄も不幸者ではなかつた、妻に対しては熱烈な愛を捧げた夫であり、母に対しては温良によく仕へた息子であつた。それがあゝ云ふ苦しいハメになつたのは、運だ、——と、云ふより外はあるまい。

とあるように、「私」は「読者諸君」に呼び掛けながら、兄と母の人物を平等に評価し、それによつて兄と母の悲劇を

「運」と総括する。このように「私」が「読者諸君」を意識しながら中立的な立場を取って兄と母への思いを言い表している。こうした語り口は「読者諸君」に兄と母の關係のミステリアスな一面を感じさせながら、「読者諸君」の関心を「私」の目に映る兄と母の關係に向けさせる効果を持つと言える。次に、小説中の転覆事件の直後と現在において、本作の語り手「私」は兄ならびに母に対する思いをどのようにあらわしているかに着目したい。

・兄の行為に非難すべき所はないのだし、母にしても無事に助かつた以上は息子の真心が天に通じたのでもあらうし、それに就いて兄をいつ迄も恨むと云ふのは勝手過ぎる。——と私は最初、母よりも寧ろ兄に同情しないでは居られなかつた。

・しかし私は執方かと云へば母の方に同情する。あゝ云ふ氣質の人が、あんな風に変つて行つた径路を辿つて見ると、彼女としては十分尤もな理由がある。けれども又、私は若し兄だつたとして、彼が遭遇したと同じ場合に遭遇したら、私は果して兄よりより善き行ひを為し得ただらうか？「為し得る」と私は答へたい、願はくばさう云ひ切れる勇氣が欲しい、——さう云はなければ母は私をまでも恨むであらう、だが、私にはやはりそれを云ひ切る勇氣のないのを口惜しく思ふ。さう思ふ時、私は私の胸の中で、（あゝ母よ、どうか私を赦して下さい、私も

恐らく兄と同じやうな人間です！）さう云つて叫ぶ良心の声を感ずる。

傍線部からは、現在の「私」が兄よりも母に多く同情を寄せる様子が見て取れる。しかし、その一方で二重傍線部のように、「私」は一貫して船が転覆した直後の兄の行為を否定できないと述べ、自分が兄の立場に近いことを表明する。結婚を巡る兄と嫂の「計略」への考えを述べる箇所にもこうした特徴が顕著に見て取れる。兄は藤子（嫂）と結婚するために、藤子の社交的な才能を発揮させ、「自分が撰んだ嫁でなければ安心しない」母の意に叶うようにと「計略」を練り、母はその「計略」にはまる。「私」は兄と嫂の「計略」に対して、「兄も嫂も別に非難されるべきではないのである。ずるいにもせよ、それは完全に善良な動機から出た」と捉えており、さらに、藤子（嫂）の行為に対しても、「魅し去つた」と云ひ「技巧を用ゐた」と云つても、決して悪い意味ではなかつた」、「彼女は母を「欺いた」とは云へないのである」と述べ、嫂の行為を否定できないと繰り返して強調する。では、他人から「ずるい」と思われるかもしれない兄と嫂の「計略」を「私」は、なぜ「完全に善良な動機から出た」と捉えているのだろうか。それは「母のかんどころをよく心得て居る兄の指し金にも依つたであらう」、「要するに、彼女は兄を愛するが故に、どうかして兄の母の氣に入らうと努めた、——或は取り入つたとまでは云へよう」という「私」の考えに着目

することで理解できよう。つまり、母を幸せにしたい兄と嫂の気持ちを感じ取ったからこそ、「私」は兄と嫂の「計略」を「完全に善良な動機から出た」と捉えているのである。さらに、「彼女（嫂＝論者注）は母を「欺いた」とは云へないのである。それは私は今でもさう思ふ」と、現在においても、「私」は嫂の行為を否定できないと補足する。このように、あくまで兄あるいは嫂の立場に「私」が近いことを表明することで、母の「不幸」なイメージを曖昧にさせ、母の「姑根性」を際立たせる。しかしその一方で、「私」は、「（あゝ母よ、どうか私を赦して下さい、私も恐らく兄と同じやうな人間です！）さう云つて叫ぶ良心の声を感ずる」と懺悔したり、また「生前の母の佛——それは今も云ふやうに非常に悲しいものだつた」や、「兄が気の毒である以上に、母は気の毒な人として、いつ迄も私の胸に生きて居るだらう」などと述べ、母の「不幸」というイメージを「読者諸君」に繰り返し印象付けてもいる。

以上、見てきたように、「私」は兄と母の関係を語る際、兄の立場を理解しつつ、なお母への思いを断ち切れない。このような語り口は読み手と想定される「読者諸君」に兄と母の関係をミステリアスに感じさせながら、「読者諸君」の関心を「私」の目に映る兄と母の関係に向けさせるはたらきを持つことが分かった。本作の語りの推理小説への傾斜は谷崎が大正後半期にかなりの量の犯罪小説^③を発表し続けたこ

と深く関わっているのかも知れない。ともかくも、本作は推理小説の仕立ての中に〈母性思慕〉が表現されている作品であると言えよう。また、「私」が兄と母の関係を中心に語りながら、自らの母への思いの変化を言い表すという題材は、亡母への思慕をテーマとする谷崎の他の〈母性思慕〉作品には見られない^④。本作の特徴であると言える。

次節以降では、「私」が兄と母の関係をどのように見ていたのかをより具体的に考察してみたい。

二 兄と母の心情の齟齬——「私」の認識を中心に

「私」は「あの時分（父没後＝論者注）が私たちの「家庭の幸福」の絶頂だつた」と言う。その頃の母の生活スタイルは次のように追想されている。

夫には不幸にして先立たれたが、自分は此の後まだいくらかでも長生きをしたい、早く子供たちの身を固めさせて、孫の顔を見て、老後の楽しみを味はひたい、——彼女は始終さう思つて居たばかりでなく、誰に向かつてもそれをしやべつた。しやべるだけでも余程うれしさうな様子だつた。「年を取る」「こと、「死ぬ」と云ふこと、——それくらゐ彼女の嫌がつたものはなかつた。五十近くなつても彼女はまだ髪を染めて居た。「死」を恐れる程度がどんなにひどかつたかは、親類や家内中での笑ひ草にな

つた一つ話が残つて居るのでも明かである。

父の没後、母は死を恐れると同時に、子への執着を深めていく。こうした母の生き方は彼女の「駄々子」な性質と不可分だと考えられる。これは母の出自と性格が説明される次の箇所にも明らかである。

威張り屋のくせに意気地なしで、呑気のくせに神経質で、我が儘な人の好い婦人、——さう云ふ婦人はよくあるタイプである。さう云ふのに限つて機嫌買ひで虚栄心が強いものである。殊に私の母は下町の商人の家に生れた生粋の江戸ッ兒だつたし、苦勞を知らずに育つて来た箱入娘だつたから、五人の子の母になり五十の歳になつてまだ駄々子気分が抜けなかつた。

傍線部に見られるような、「五十」に相応しからぬ母の子どもらしい性質は、日常の生活にも屢々あらわれている。それは例えば雷が鳴つた際、「身動きが出来なくなつて、直ぐに線香を立てさせ蚊帳を吊らせ、蚊帳の中に少なくとも子供たちの一人に護られてじつと竦んで居る」という様子や、また夫が死んだ時に「亡骸に取り着いて子供のやうに声を揚げておいおいと泣いた」という姿、「我が儘な無邪気さ」や、「だゞッ兒」のように「眼をしぼだゝいて居る」という子供のよくな表情からも看取できる。さらには、母が拘る「孝行」の基準にも「駄々子」の一面があらわれている。

・母が死を恐れる一面には、子に甘えたいと云ふ了見が余

程手伝つて居たことも明かだつた。「子供たちはこんなにも自分を大事にしてくれちゃほやしてくれる。自分は何不足のない仕合はせな身の上だ」——それを確かめ信じる事が、彼女には此の上もない喜びであり慰藉であつた。

・母は私たちに甘え私たちは母に甘え、両方で甘やかし合ふところに深い情愛があつた。私たちはよく母に怒られたり泣かれたり「不孝者」呼ばはりやをされたものだが、怒る方でも怒られる方でも腹の底では信頼し合ひ安心し合つて居た。

傍線部に見られる母の「仕合はせ」の基準や、また「両方で甘やかし合ふ」、「腹の底では信頼し合ひ安心し合ふ」という母と「私」たちとの日常の接し方、そして、繰り返し母が「不孝者」という言葉を口にするところに着目すれば、母の言う「孝行」が、子が親を敬い尽くすという儒教的な「孝行」とはやや異なつたものであることは明らかである。つまり、母が拘る「孝行」とは、「両方で甘やかし合ふ」という「駄々子気分」の延長上にあるものである。ここで問題なのは、母が自分の子どもらしい性分が子（Ⅱ兄）の負担になることを意識せず、子（Ⅱ兄）に自分の望む「孝行」を一方的に強要していることである。この点は、兄の「孝行」に過剰に拘る母と兄の関係に対して「私」が抱く懸念からも理解できる。

有體に云へば、母は兄が大学を卒業するかしない時分か

ら、もうそろそろ彼の為めにいゝ嫁の口を捜して居た。

それが彼女自身の為めでもあつたことは云ふ迄もないが、何にしても一日も早く兄の身を固めさせ、自分も又、

「孝行な子供」だけでは満足出来ないで「孝行な嫁」や「孫」を見たかつたのであらう。かう云ふ母を持つて、彼女のお目かねになつた嫁を持たされることは、時としては息子の為めに迷惑なこともないとは云はれない。

「孝行な子供」、「孝行な嫁」、「孫」という母の望みを一身に背負わされる苦しい立場に置かれた兄に「私」は同情を寄せている。この同情を裏返せば、そこには、兄の「孝行」を一方的に強要している母と兄の關係の間に危機が見出させよう。結局、兄の結婚を巡り、「私」の懸念は現実となる。

「うちの倅は感心な者だ。大学では秀才だし、品行は方正だし、親には従順だし、——と、成る程さうには違ひなかつたが、さう思つて彼女は兄を信じ切つて居た。

若し兄があんな謹直な男でなく、放蕩でもやり始めたら気の弱い母は嘸泣かされたことだらうに、其の点に於いて彼女は全く運が好かつたと云はなければならぬ。けれども母は其の好運を当然のやうに考へ、あんな優しい息子が自分の云ひつけを背く筈はないと極めて居た。

母は「従順」で「優しい」兄が彼女に服従することを当然のやうに信じている。しかし、兄は、自身の結婚について、「己は決して自分の恋愛のために母の利益を度外視しては居な

い」、「たしかに此の結婚は己を幸福にすると同時に母をも幸福にする」というやうに、母の「利益」や「幸福」だけを考へているのではなく、自分の「幸福」を求めている。兄と母との心情の懸隔は明らかである。すなわち兄は、母と妻の二者択一を迫られた場合には、必ずしも母が思うやうな「従順」で「優しい」息子ではないのである。この点については、「私」も、「兄は結婚や恋愛の問題を可成り重要視して居る青年らしく私には見えた。此の問題ばかりはいくら親孝行の兄でも、母親の擇んだものを拒絶しないとは限らなかつた」と捉えている。ただし、母と兄に食い違ひがあつても、「私」が兄の立場に近いことには変わりはない。

万一兄の反対に出会ひでもしたら、彼女はどんなにびつくりし、どんなに腹を立て、且どんなに落胆し、狼狽するか。さうなつて来た時、道理から云つても当然兄に加勢をしなければならぬ私は、その為めに「層母をひつくりさせ、落胆させるに極まつて居る。母は私が裏切りをしたとも思ふであらう。——たとひそれが一時の感情であつても、私には辛いことだつた。」

傍線部に見られるやうに、「私」は自身が「兄に加勢」をする正当性を認めている。しかし、二重傍線部では、「私」が「兄に加勢」をすることで、母の気持を損ねることを気にかけてもいるのである。この時点で、兄と母の心情の齟齬は既に生じているが、兄と母との關係の破綻は、先述した兄の「計

略」の成功によって回避される。しかし一方で、この「計略」は、兄がいつも「孝行」をしてくれらるだろうと思う母の誤解を深める結果にも繋がっている。母は兄夫婦の「計略」を知らず、「散々世話を焼いたのだから、此れからはちつと夫婦の者に恩返しをして貰はなくちや」や、「旅行から帰つて来たら何処其処へ連れて行つて貰ひませう」や、「早く孫に手を曳かれてお花見にでも行くやうな身の上になりたい」などと、二人の結婚のために骨を折つた自分への恩返しを兄と嫂（＝藤子）にひたすら期待する。折良く兄は新婚旅行中も「親孝行」を忘れず毎日絵ハガキを母に送る。結局、母は兄夫婦の行動を恩返しと勘違いし、「其れ等の絵ハガキを見て居るうちに、とうとう夫婦の帰りを待ちきれなくなつたものか、二人がちやうど箱根から熱海へ廻つた時分に、——それでもいくらかは遠慮して、一日二日置いてから予め電報を打つて出かけて行つた」とあるように、兄夫婦の新婚旅行に加わつてしまう。兄と母のこうした心情の齟齬は、新婚旅行中の交通手段を選ぶ場面で再び露わになる。兄は、「車もいや、自動車もいやで、それぢや仕方がないから船と云ふことになつたんだ。船で酔ふのは知れて居たけれど、酔つても何でも命に別条のない方がいゝと云ふ訳だつたもんだから、——」という母の言葉を「私」に伝え、「私」はそれに対して、「その時の兄の口調は妙であつた。母に不愉快を感じて居る」と感じてゐる。先述した「私」の考えを合わせて見れば、兄の「不

愉快」な口調は、兄と母の心情の齟齬の表れだと言える。「私」が感じ取つた兄と母の心情の齟齬は、船が転覆した後に顕在化する。

母は私たちに顔を見られるのを厭ふ様子だつたが、兄に對しては特にさうだつた。兄を恨むと云ふのではなく、兄の前へ出ると、心細さうにコツソリと下を向く。さうしてそれが、一々兄の方へも反響する。兄とても勿論母を恨むのではないが、進んで愛することも出来ない、——愛する事を禁ぜられて居る、と云ふ風に見えた。けれども兄は全く不幸な人であるとは云へなかつた。なぜなら、彼はそんな苦しい立場にありながら、嫂からは絶えず熱烈に愛せられて居たから。兄夫婦は、母にも私たちにもそれを出来るだけ押し隠して居た。しかし私にはそれがよく分つたし、隠せば隠すほど二人はシツカリと結び着いて居るやうに思へた。斯う云つたからとて私は何も兄を非難するのではない。たゞ母の心になつて見れば、それがどんなにか彼女の淋しさを深めたでもあらうし、兄にしても嫂に愛せられたがために、一層の苦しみを嘗めたであらうと、さう考へるまでである。

と「私」が語っているように、船が転覆した後、母が兄に面すると「心細」さを示し兄を避けるようになった一方で、兄も母の悲しみを感ぜながらも、母とのぎこちない関係を避けようとする。ここに見てきたように、兄と母の関係は船が転

覆する前（兄の結婚した時点）から、二人の心情の齟齬によって既に危うさを孕んでいた。船が転覆した時、兄が母より妻を先に助けたことで、ついに、二人の心情の齟齬が顕在化し、兄と母は互いに互いを避けようとする関係となつてゐる。

三 母の変化

三・一 生や兄に執着する母

本節では、母がなぜ「私」ではなく兄ばかりに期待するのかという点について考察したい。「私」の回想の場面は、幾つかのエピソードから成る。その中で、兄を中心とする兄弟（「私」たち）と母との関係は、鰻と梅千の食べ合わせの挿話を通じていきいきと語られる。

母が鰻と梅千の食べ合わせで腹痛を起した時、家中の者は医者に電話をかけたが、房州にいる兄を電報で呼び寄せたりする。その中にある「私」は、「あまり事件が馬鹿々々し過ぎる」と思つて、外出してしまう。そんな「私」に向かつて母は、「お前はきつと私の子ではないんだらうから」、「お前のその心があんまり薄情だと云ふんです」と不満をこぼす。一方で、「私」と異なり、自分の大切な試験を投げ出してまで駆けつけた兄に対しては、「お前よりも兄さんの方が孝行だよ」と褒めちぎっている。これは単に兄の「孝行」に満足しただけでなく、母を「ちやほや」しない「私」に対する、

「駄々ツ子」の僻みでもある。鰻と梅千の食べ合わせで命の危険を招かぬことを知っている「私」は「駄々ツ子」のようになすねる母に、「何ですお母様、冗談ぢやありませんよ。たかが鰻と梅千の喰べ合はせぐらゐで死ぬ奴があるもんですか。こんな事で僕に叱言を云ふなんて、又みんなに笑はれますぜ」と説明するなど、冷静に対応している。さらに「私」は、「ちやうど大学の二年から三年へ移る時で、試験勉強に行つて居た兄は、そんな事で呼び返されて大切な時間を潰した訳だつた」と言う。兄の行動に対する「私」の言及からは、兄の「孝行」への誠実さが見出される。しかし、兄の行動は、兄がいつも「孝行」をしてくれるのだという母の誤解を深めさせると同時に、母の「我が儘」をエスカレートさせる。この点は、前章で見た兄夫婦の新婚旅行に加わる母の行動に端的にあらわれている。

「私」と同様に、妹もまた「駄々ツ子」である母を無条件には受け入れていない。これは彼女が「気の弱い涙脆い」母に対して、「お母様はほんたうに泣き虫ね」とからかつていることから分かる。新婚旅行中の兄夫婦のところへ母を送り届けて東京へ帰ってきた女中は、「御隠居様は軽便鉄道でひどくお酔ひになりましたが、でも彼方へお着きになつてからは御機嫌でございました。旦那様も奥様も大さうお喜びでございます」と言うが、女中の発言に対して、「私」は「大さうお喜びでもなからうぜ、きつと」と、兄の気持ちを考えて

ない母の行動に対して批判をこぼす。また、妹も「ほんたうだわ、いやなお母様ねえ、人の邪魔に行つたもんだから、罰が中つて軽便に酔つたんだわ。好い氣味！」と母の「我が儘」への批判を露わにする。

このように、鰻と梅干の食べ合わせの挿話は、死ぬことを必要以上に恐れる母像を浮かび上がらせる一方で、母の生の充足が兄にあることを物語るエピソードだとも言える。なぜなら、父が死んでから、母は、「自分は此の後まだいくらでも長生きをしたい、早く子供たちの身を固めさせて、孫の顔を見て、老後の楽しみを味はみたい」、「子供たちはこんなにも自分を大事にしてくれちゃほやしてくれる。自分は何不足のない仕合はせな身の上だ」と常に思っている。すなわち生や子に執着する母は兄に大事にされ「ちやほや」してもらふことで、生を充足させるからである。だからこそ、母は「従順」で「優しい」兄ばかりに期待することになるのである。

三・二 死を受け入れようとする母

こうした様々な出来事を通じて、母は兄が彼女の望む「孝行」な息子なのだとか固く信じるようになる。だからこそ、船が転覆した際、彼女より妻を優先した兄の行為は母にとって致命的な打撃となるのである。

以来、「駄々子」だった母は、「少しもだゞを捏ねて居る

やうなわざとらしい風はなかつた」と述べられるように、大人しくなり、すっかり別人に変わる。

「私たちが機嫌を取らうとすればするほど、母は一層悲しい眼つきをして顔を背けた」というように、母は自身と子供たちの間に距離を置くようになり、子供たちと打ち解けようとしなない。「私」たちが「観劇」や「物見遊山」に誘おうとすると、母は、「いゝえ、私は留守居をして居ますから、お前たちで行つておいで」と断り、そして、「私」たちの前に、「さう云つて、淋しく笑ふばかりだった」と無理に笑顔を作る。さらに、「強ひて誘ひ出さうとしたり、ちやほや云つたりすると、直きにホロリとして、極まりが悪さうに奥の間へ引つ込んでしまふ。私や妹に対してもさうだったけれども、兄夫婦に対しては殊に、それが甚しかったやうに思はれる」とあるように、母は意識的に子供、特に兄を回避するようになり、臨終まで子供たちを拒否し続ける。

息を引き取らうとする時、兄夫婦や私たちが枕もとへ顔を出すと、／「あゝお前達、そんなに側へ寄らないでくれよ、お父様がお迎ひに来ていらつしやるんだから。

——／さう云つて、手で私たちを拂ひ除けるやうにしながら死んで行つた。それが彼女の最後の言葉だった。

このように、母は妻から「熱烈に愛せられて居た」兄と対照的に「淋しさ」を抱えて死ぬこととなる。ここで留意しておきたいのは、母が兄を避ける理由についての「私」の見解で

ある。

・強ひて誘ひ出さうとしたり、ちやほや云つたりすると、直きにホロリとして、極まりが悪さうに奥の間へ引つ込んでしまふ。私や妹に対してもさうだつたけれども、兄夫婦に対しては殊に、それが甚しかったやうに思はれる。彼女は兄夫婦の仲の好いのを嫉むのではない、が、それを眼の前に見るのは辛い。——と云ふやうな風であつた。あれほど「忤自慢」「嫁自慢」であつた彼女は、もうふつりと子供のを口にしなかつた。

・母は私たちに顔を見られるのを厭ふ様子だつたが、兄に対しては特にさうだつた。兄を恨むと云ふのではなく、兄の前へ出ると、心細さうにコツソリと下を向く。

ここでは、母が兄を避ける理由は、「兄夫婦の仲の好いのを嫉む」のでもなく「兄を恨むと云う」のでもない、ただ「兄の前へ出ると、心細さうにコツソリと下を向く」と説明されている。右の叙述に見られるように、母は兄が結婚する前までは「孝行」息子である兄を自慢しており、兄が結婚した直後（正確に言えば、兄夫婦の新婚旅行中に船が転覆した事件に遭遇した後）には、兄に対して「心細」さを感じて、兄を回避するようになった。この点について、船が転覆した後、親戚の者が母の前に子供たちを褒める時、母が「淋しく笑ひながら、静かにうつむいて」「無理に笑顔を作り、親戚の前に悲しみを隠そうとしていることを考え合わせれば、転覆事件

を境として、母は兄が自分の思うような「孝行」を捧げる息子ではないと分かつたため、兄に面と向かうと、「心細」さを示し、避けるようになったのであると言えよう。更に言えば、転覆事件を通じて、母は兄をはじめとするすべての子供に対して不信感を抱いて、「私」たち、特に兄を避けるようになったのである。

このように、母は転覆事件を通じて自分と息子（Ⅱ兄）との心情の齟齬を感じるようになる。そして、子供たちとの関係を積極的に築き直そうとはせず、むしろ、「ロクに物も喰はないで、たゞ影の如く生きて」、「亡き良人の跡」にひたすら執着し、死ばかりを望むようになる。つまり、かつて必要以上に生や子に執着した母は、転覆事件以後は、子供たちと打ち解けようとせず、死をひたすら受け入れようとするのである。この変化には、子への依存なくては存在しえない母の「不幸」が見て取れる。

四 「不幸な母」という言葉が持つ意味

現在の「私」は、亡母を「不幸な母」と位置付けて、「生前の母の悲しい佛がありあり眼の前に浮かんて来る」や「生前の母の佛——それは今も云ふやうに非常に悲しいものだつた」、「兄が気の毒である以上に、母は気の毒な人として、いつ迄も私の胸に生きて居るだらう」と繰り返す。さらに、「あ

ゝ、あれほどにして「死」を怖れた母が、誰よりも死にたくなかつた母が、とうとう死んだことを思ふと私は悲しい。(中略)こんなにも「死」を怖れて居る人に、いつか一度は「死」を与へると云ふことは余り残酷だ。外の人を十人殺すよりも残酷だ。――で、そんな場合にふと、母も一度死ぬんだと考へると、わたしは溜らなく哀れだつた」と、死ぬことを必要以上に恐れた母の死を悲しんでいる。それによつて、「家庭の幸福」の絶頂から「不幸」へと落ちた母への深い同情が明示される。

野口武彦氏は兄Ⅱ谷崎といった捉え方を前提として、作中の兄の自己弁明の撞着に着目し、兄と母にとつての不幸は「三人が遭難したとき兄はすでに生母の母性を自分の妻に転移していたことだつた」(3)、と捉えている。しかし、本作の結末で、「私」が兄の遺書を読んだ後、兄ではなく、母を「不幸」と思うことには、それとはまた別の理由があるのではないだろうか。

遺書の最初に、

あゝ、私はほんたうに死にたくない。私は今はの際までも猶彼女を愛して居る。彼女を捨てゝ此の世を去ることは、さうしなければならなくなつたのは、何と云ふ悲しい運命だらう。さう云つては此れから冥途でお目に懸る母に対して済まないのだけれども、……………

と書かれているように、兄は妻を愛するため「ほんたうに死

にたくない」と披瀝する一方で、亡母への「良心」の呵責を打ち明けている。こうした兄の複雑な心情からは、妻への愛情と「親孝行」を両立させることができなかった兄の苦悩が垣間見ることが出来る。しかし、遺書の中で繰り返し強調されている表現に注目したい。それは、遺書の最初に書かれている妻への愛情から生じる「ほんたうに死にたくない」という思い、また「何と云ふ悲しい運命だらう」という「運命」への怨みにも似た表現である。

・私がどんな苦しい立場に陥り、どんな心持で此の世を捨てなければならなくなつたかは、此の書き置きを最後まで読んでくれゝばお前たちにも分る筈だ。繰り返しして云ふが私は決して世の中がイヤになつたのではない、人間が浅ましくなつたのでもない。私は全くあの偶然の出来事のために葬られるのだ。生木を裂くやうにして悲しい恋しい彼女の住む世の中から、永久に去るべく余儀なくさせられるのだ。私は誰かを恨みたいけれども誰を恨むアテもない。たゞく恨めしいのはあの偶然の出来事だ、多くの人の中から撰りに撰つて私だけが、あんな恐ろしい出来事に打つかつてしまつたその運命だ。

・その偶然が私に恐ろしい過誤と不幸とを齎したのだ。私は運の悪い罫を引いたのだ。

傍線部に見られるように、死を選ぶ時点においては、兄は、母を思うのではなく、運命への怨みと妻への愛情とばかりを

考えている。ここでは、船が転覆した際、兄が母より妻を先に助けたことを「あの偶然の出来事」と称し、そして、波線部のように「その偶然」がもたらした「運命」に対して恨み言を繰り返していることに目を向けた。これを先に述べたような交通手段の選り好みをする母の言葉を伝える時の兄の「不愉快」な口調に結び付けるならば、母が船を攘げなかったら（あるいは母が新婚旅行を妨害しに来なかったら）、「あんな恐ろしい出来事に打つかつてしまったその運命」に出会わなかったはずだ、という兄と母の心情の齟齬が露わになると言えよう。すなわち、そこでは母が望むような「孝行」な兄ではなく、自分の「利益」ばかりを考える兄の一面が明らかになったのである。結局、兄は『親殺し』の悻、「親を裏切る不孝者」という罪悪感に耐えきれず自殺する。遺書の最後は次のように閉じられている。

……母は死んでしまったけれども、私にはさうは思はれない。私が生きて居る限り、母も生きて居るやうな気がする。『どうかお前は孝行な悻だ』と云ふことを、私に見せておくれ。私を心から喜ばしておくれ。嫁の為に命を捨てゝかゝつたやうに、私の為にも命を捨てゝかゝつておくれ。』母は始終私の耳に、さう囁いて居るやうな気がする。私が死ななければ母は決して喜んではいないのだ。……

一見、兄は母の望む「孝行な悻」になるために、自殺するか

のように見える。しかし、妻を愛するため「ほんたうに死にたくない」という思いと、また「私が死ななければ母は決して喜んではいくれない」という思い、この相反する二つの感情を考え合わせると、それらによる葛藤こそが自殺という行動に繋がったのだと言えよう。つまり、兄の自殺は、「親孝行」或いは母のためではなく、実際にはその葛藤から逃れるために選んだ手段だと考えることができる。それ故、「私」は「兄も不孝者ではなかった、妻に対しては熱烈な愛を捧げた夫であり、母に対しては温良によく仕へた息子であつた。それがあゝ云ふ苦しいハメになつたのは、運だ、——と、云ふより外はあるまい」と結論付けたのだらう。遺書を読んだ後、「私」が母を「不幸」な存在として位置付ける理由もそこにこそあらう。

おわりに

「私」によつて母への断ち切れない思いが示されるという結びは、本作の枠組みを考えるうえで見過ごすことができないと考える。最後に、本作の末尾を改めて見てみよう。

さうして私は、兄が死んでしまつてからも、やつぱり母は生きて居るやうな心地がする。兄が気の毒である以上に、母は気の毒な人として、いつ迄も私の胸に生きて居るだらう。

母を思い続けている、というこの結びは、大正八年に発表された谷崎の『母を恋ふる記』（大阪毎日新聞）・『東京日日新聞』の結びを彷彿とさせる。『母を恋ふる記』は三十四歳の語り手「私」が、夢の中で「七つか八つの子供」となり、「白い一とすぢの街道」を独りで歩き続けて、最後に、若く美しい母と出会う。二人が抱き合うところで「私」は夢から覚めたという内容の小説である。その末尾で、夢から覚めた語り手「私」は母の死を思い出して涙をこぼし、若い時分の母を想起させる「三味線の音」が「まだ私の耳の底に、あの世のおとづれの如く遠く遙けく響いてゐた」と記し、語りを締めくくる。「三味線の音」という暗喩を用いたこの結びによって、「私」の亡母に対する思慕の念は永遠に続くことが暗示されているのである。

そして、大正六年十一月に、『中央公論』で発表された『ハツサン・カンの妖術』にもこのような手法が見られる。『ハツサン・カンの妖術』は男主人公「予」とミ斯拉氏とが知り合いになるまでの経緯が中心となっており、「予」が魔法使いのインド人ハツサン・カンの衣鉢を借りミ斯拉氏の魔法によつて須弥山で亡母の輪廻の姿に出会つて、亡母への懺悔や思慕をあらわすという、いわば〈母性思慕〉の要素を含む作品である。物語の最後の亡母と再会する場面は僅かな一節しか描かれていない。「一羽の美しい鳩」となった母が「予」のような「悪徳の子」を生んだために「未だに佛に成れない」

といい、母の言葉に対して、「予」は「お母さん、私はきつと、あなたを佛にしてあげます」と誓い、「彼女の柔かい胸の毛を、頬に擦り寄せたきり、いつ迄も其処を動かうとしなかつた」。鳩となった母の胸に長らく顔を埋めるという結びからも、主人公「予」の亡母への思慕の念は永遠に続くことが予期される。その意味では、亡母を思い続けることを示すという結びは大正期の谷崎の〈母性思慕〉の要素を含む作品に共通している特徴であると言えよう。

本作はあまり研究の俎上にのぼることのなかつた作品だが、本稿に示したように、亡母への思慕という側面を持ちながら、従来の谷崎の〈母性思慕〉作品に見られるような、息子からの美化された亡母に対する無批判で一方的な思慕の念と異なる形で、すなわち、「私」（＝子）が兄と母の関係を中心に語りながら、母への思いの変化を言い表す作品となっている。谷崎の〈母性思慕〉作品をより深く理解しようとするならば、『不幸な母の話』もまた重要な作品と言えよう。

注

(1) 本作に関する同時代評には高い評価と低い評価との二様がある。すなわち、岡栄一郎氏は、「三月文壇を評す」Ⅱ谷崎氏の『不幸な母の話』（大正十年三月十七日「時事新報」）で、「谷崎潤一郎氏の今月公にした二つの小説『私』と『不幸な母の話』Ⅱ論者注」を読んで、「三三年前から氏の作物に現はれてあ

一種の焦燥の気が殆ど跡を絶つてゐるのを先づ不思議と思へば思はれる。一つ素晴らしいものを書いて世間を驚かしてやらうという気もちもある」と高く評価する。J、J生は「本質の相違」——三月の創作（大正三月十四日「やまと新聞」）で、「人生の觀察を外部から見て内面に及ぼんとする」「破綻のない作品」と、作品の創作方法に高い評価を与える。その一方で、小島政二郎氏は、「三月の文壇評」谷崎（潤）と室生氏（大正十年三月十七日「読売新聞」）で、「中央公論」には谷崎潤一郎氏の「不幸な母の話」と、室生犀星氏の「万華鏡」とが載つてゐるが、どちらも大した作ではない」と低い評価を下すのである。近年、日高佳紀氏は、また「不幸な母の話」を、「一連の母恋の物語と并列に置くこと」もでき、「親殺し」モチーフも窺える作品」（『谷崎潤一郎必携』学灯社 平成十二年四月二十日）と位置付ける。

（2）野口武彦『谷崎潤一郎論』（中央公論社 昭和四十六年八月二十五日）

（3）大正後半期に発表された犯罪小説には、発表順に、『前科者』（『読売新聞』大正七年二月三月）、『人面疽』（『新小説』大正七年三月）、『金と銀』（『黒潮』大正七年五月）、『白昼鬼語』（『大阪毎日・東京日日新聞』大正七年五月七月）、『柳湯の事件』（『中外』大正七年十月）、『呪はれた劇曲』（『中央公論』大正八年五月）、『或る少年の恐れ』（『中央公論』大正八年九月）、『秋

風』（『新潮』大正八年十一月）、『途上』（『改造』大正九年一月）、『私』（『改造』大正十年三月）、『AとBの話』（『改造』大正十年十月）、『或る調書の一節』（『中央公論』大正十年十一月）、『或る罪の動機』（『改造』大正十一年一月）がある。その中で、『不幸な母の話』と、『不幸な母の話』と同時期に発表された犯罪小説『私』は、大正十年十月に、新潮社によって出版された単行本『AとBの話』に収められた。三作が一つの単行本に収められたことから、従来、本作は犯罪小説の趣向を持つ作品として扱われていることが窺える。

（4）亡母への思慕をテーマとする谷崎の他の作品は四つ挙げられる。『ハッサン・カンの妖術』『母を恋ふる記』『吉野葛』『幼少時代』である。これらの作品における男の主人公たちの共通点は、息子からの美化された亡母に対する無批判で、一方的な思慕である。

（5）注2に同じ。

【付記】谷崎作品の引用は『谷崎潤一郎全集』（中央公論社、昭和五十七年）に拠る。ただし漢字は適宜通行の字体に改め、ルビは省いた。傍線は全て論者の付したものである。また／は改行を示す。

（チヨウ・レイセイ／本学大学院博士後期課程）